



気がつけば30年

村尾 和俊

徳島大学大学院医歯薬学研究部皮膚科学分野准教授

まだまだ若手のつもりでいたが、気がつけば皮膚科医になって30年以上経っていた。もともとあまり計画性のない性格で、学生時代は軟式庭球にあけくれ、さほど将来のことは考えていなかった。皮膚科を選んだのは自分が少し湿疹もちだったのと、荒瀬誠治教授の人柄にだまされて惹かれてであったが、入局を決めたのは6年生の年末であった。

荒瀬先生には「1例1例を大切に」そして「何か“Neues(新しいこと)”をみつけるように」とよくいわれた。こうみえても素直な性格なので、これはずっと守っている。2年目からは愛媛県立中央病院で研修した。年がら年じゅう重症熱傷が来る病院で、しかも皮膚科だけでみていたのでしばらくは火を噴いた。週1回、英語の教科書の輪読と抄読会があったが、勉強が終わるとサウナ→飲み屋→説教、であった。熱傷以外の患者も多く、がむしゃらに頑張った。指導いただいた桑原 章部長・定本靖司部長は仕事には厳しかったが愛情一杯の先生方であった。二人ともよく飲む先生だったので自分もよく飲むようになった。

30歳になる年の5月から高知市民病院に一人医長として赴任した。時期外れであったためか、辞令を市役所に取りに行くようにいわれた。で、市役所に行ったら市長室に案内され、「え?」と思う間もなく高知市長が出てきて直々に訓示と辞令をいただいた。ひっくり返りそうになった。だからというわけではないが、高知市民のためにと頑張った。若造だったので、なめられてたまるかという思い

もあった。スーパーに並ぶ魚が安くておいしかった。お酒も進んだ。

大学に帰ってからは病棟医長をしながら実験もさせてもらった。このころはやる気満々、馬力もあって一番仕事をしたと思う。その後、アメリカに留学させてもらった。異国の地でさまざまな文化に触れる生活は刺激的であり、家族ともゆっくり過ごせ本当に楽しかった(研究も一応頑張った)。最近は留学を希望する人が減っていると聞く。若い先生方には無理をしてでも海外に行ってほしいと思う。間違いなくその後の人生が豊かになるから。

大学のスタッフとして患者さんをみるようになったが、いつまでたってもわからないことばかりである。これまで確たるビジョンをもって皮膚科医をしてきたわけではないが、与えられた場所で一生懸命頑張ることをモットーとしてきた、つもりであった。しかし、つまるところまったく頑張りが、勉強が足りていないのである。若いころは時間は無限にあるように感じていて、その大切さがわかっていなかった。あのころの自分に会えるなら、時間を無駄にせずもっともっと頑張れといいたい。

などと思っていると、喉の渇きとともに冷蔵庫に鎮座するビールの姿が浮かんできた。これや、これがあかんのや。飲んでる場合やない、もっと頑張らな。

でも今日はもうええか。原稿も書けたし、どうせやから楽しく飲もか。

たった一度の人生なんやから。